

狐狸庵閑話

狐狸庵閑話

遠藤周作

桃源社開板

狐狸庵閑話

昭和四十年七月十五日 発行 ©

定価 九百九拾円

《検印省略》

著 者 遠藤周作

発行者 矢貴東司

印刷者 奥村正雄

発行所 株式会社 桃源社

東京都中央区日本橋蠣殻町一丁目

十二番地 電話 ⁽⁶⁷¹⁾ 四〇〇一、二番

狐狸庵日乘大意

名代のひやうきん者、狐狸庵を存ぜぬとはチトをかしか
らうて。

狐狸庵、いづこの生まれか、その性から推して奇怪至極、
春やあけぼの、ちぬの海見遙かす深江ふかえの里はづれ、葦の葉
かげの大寺学校に、欲垢と梵悩に身を染めて紛紛まふと見えし
は六情やうやく兆す子供衆のころなりしか。

保久良の宮に一切成就の祓極めて、弓弦ゆづるばの、神に願かけ
穢を聖め、まかり出でたる、咲く花の匂ひ初めたる江戸お
もて、頃は白齒の十八九、菖模様のいなせなせりふ、「アイ、

業腹な。渋帟に身すぎ世すぎの戯作でも書かうわいな」と
四季迅速、狐狸庵、早や六欲の皮すりむけたる賓頭盧尊者
の四十男、書き溜めたわくく。

「狐狸庵日乗」かく生まれ生づく生まれたる。序とか何とかいふ物を態とばかりお祝まうし、云爾。

甲賀伊賀町の隠士 琅玕洞主人
書 ④

目次

踏絵	琅玕洞の発明	廃墟の眼	初春や	師走	居候について	犬	易者と透視家	鳥
116	101	86	71	59	45	31	17	3

日記

130

切り抜き帖

143

鏡

157

南から来た人

171

避暑地

185

困った虫

199

挿絵 藤城清治

狐狸庵閑話

鳥

子供の頃から動物が好きだった。私と家人とが口争いをする一番の種は、動物に関してである。

犬もキラい、猫もキラい、鳥もキラいという人の心情は私には不可解であるが、この不可解な人種に属する者を私は妻にもらったのである。

それでも、何とか、かんとか言訳けをしたり、説きふせたりして、私は、猫一匹、四十雀^{ヒナ}五羽、カナリヤ二羽、金魚二十四匹、カメ一匹を現在、飼っている。私は一日のうちで、彼等をじーっと見ているのが一番たのしい。地面にしゃがんで、カメが池から首をだし、その回りを金魚が泳ぎまわっているのをじーっと見ていると一時間も二時間もあきない。家人はそんな私を変な男と言うが、本当に楽しいのだから仕方がない。

動物を飼う人にはミザントロープ、つまり人間ぎらいの者が多いらしいが、私はそんなことはない。人間がきらいでは小説家という商売はつとまらない、私は動物が――動くから好きなのである。それ以上、自分の心理を説明できない、動物とはウゴクモノ也という字は正確だ。

家の猫は原稿料のかわりにもらった。同人会という劇団が四年ほど前に、芝居を書けと言ってきた。私は芝居など書いたことがないので始めは手をふったが、強引に押しきられてしまった。強引に押しきられたのみならず、私が信州の蓼科に小さな家をかりると、この劇団の女優さんたちが突然、押しかけてきた。こちらが本当にかいているか、否かを監視するという名目で、彼女たちはうまうまとわが山荘に泊りこみ、結構、避暑をきめこんでしまったのである。連中は毎日、トランプをやり、歌を歌って騒いでいたが、二階に迫いやられた私は机にむかわせられ、あんなに情けないバカンスは今までにはなかった。

芝居らしいものが、やっと書きあがり帰京すると彼女たちはある日、

稿料のかわりですわと言って玄関に籠をおいていった。籠のなかにはピンクのリボンをつけた黒い仔猫がなっていた。こちらは驚愕したが、かかるユーモアある愉快な劇団に今まで会ったことはないから、悦んで頂戴することにした。

私が一年ほど飼っていたアヒルもまた、もらったものである。ある酒場で岡本太郎氏がアヒルをかかえて現われた。なんでもクイズに当たったのだという話だ。氏は洗面所に入りアヒルに水をやろうとしたが、暴れまわるので頭を二、三回叩かれた。浦島太郎が子供の亀を憐れんでもらったように、私も彼をわが家につれて戻った。

だが浦島の亀は太郎に恩をかえしたが、わがアヒルは恩をかえずどころか、悪さばかりした。

まず餌をやっても絶対にたべない。絶対にたべないのかと言うと、そうではなく、私がかげにかくれると、周囲をみまわし、実に陰險な表情でガガッと餌をのむ。その顔つきがインケンそのものなので私は彼

に「インケン」という名を与えた。

インケンは庭中を糞だらけにして、また水がめの中の金魚を食べ、のみならず、遊んでいる近所の子供のうしろにひそかに回って、急に足をつつくのである。子供たちはインケンをおそれ、わが家に遊びにこなくなつた。

インケンは実にインケンそのものだった。私は彼の首に縄をつけ、散歩に出かけようとしたが、私が右に行こうとすると、左に行き、左に行こうとすると右に行く。たまりかねて無理に引っぱると、ギヤァツと悲鳴をあげて路の溝に入り、ドブ水の中で羽ばたきをして私は洋服をひどく、よごした。

ある人は私にアヒルは番犬よりも夜、泥棒の番をするものだと言つたが、インケンに限り、夜中に電報配達夫がこようが、客がたずねてこようが、知らん顔をして一声も声をあげぬ。

声をあげぬことを私が怒つたのではない。私が腹をたてたのは、彼が

夜中にわざと鳴き騒ぐ時間が必ずあるからである。それは私が友人たちと飲みまわり、夜遅く、家人に見つからぬよう、蹻音をしのばせて帰宅して、そっと門をあけ、門をしめ、敷石に靴が音をたてぬよう注意して玄関まで来た瞬間

「ぐわっ、がっ、ぐわっ、ぎゃオー」

彼はわざと羽をばたばた言わせ、はねまわり、鳴くのである。当然、家人は眠りをさまされ、帰宅した私を発見する。インケンとは鳥のくせに、それをチャンと知っていたものと思えない。

アヒルは好奇心の強いものと聞かされていたが、インケンも実に好奇心が強かった。庭で私が何かをしていると、一応は離れた所で見ているが、私が立ち去ったあと、必ずその場所のまわりをうろつく妙な癖があった。

彼はまた私の仕事部屋の前によくかくれていた。原稿がなかなか進まぬ時、万年筆をもったまま顔をあげると、彼が窓からあの人を小馬鹿に

したような顔つきで私を見ているではないか。

「ふん。ツマらんものを書きやがる」

とまるで、そう言っているようである。

彼には万年筆が動くのが珍しくてたまらないらしいが、私はこの時、人を小馬鹿にしたような彼の顔がたまらなく憎ったらしかった。

ただ、冬の夜、雪のふる時、夜中まで勉強をして、ふと雨戸をあけると、彼だけが一人、雪のつもった樹の下で片あしをあげたまま、じっと動かない。そのひとりぼっちの姿が少し好きだった。

しかし、私は遂に意を決して、彼を東大の三四郎池に連れていった。あそこにはアヒルがかなり住んでいる。彼にも友だちが必要と思ったからだ、私はインケンを水に放った。他のアヒルたちはインケンに見むきもしない。インケンは一羽だけ、池を泳いでいた。私はうしろをむいて急いで帰った。東大の三四郎池を泳ぐアヒルの群のなかに今日も、私のインケンはまじっているはずである。

九官鳥を飼ったことがある。長い病院生活をしている時だ。手術を前にした私の体はほとんど絶望的な状態にあった。医者も半分は手術死を予想していたらしい。その感じはこちらにもわかっていた。私はだから家人を説得して、九官鳥を買ってもらったのである。

私のその時の気持はまず、こういうものであった。かりに私が手術死をする。病院では死なんてものは日常茶飯事である。それは他の病人が死ぬのを見て知っていた。看護婦が三十分後、死体^{ライム}を担送車にのせて、ガラ、ガラと霊安室に運ぶ。翌日、掃除のおばさんが流行歌を歌いながら、その病室を掃除し、午後には何も知らぬ新患者がまたそこに入院してくるわけだ。

私は、誰かが死んだ日に空が平然として晴れ、街には人々が平然として歩きまわり、自動車やバスが平然として動いている様子を見ると、何か奇妙な眩暈^{めまい}に似た感じを感ずる。自分でもふしぎだと思いがこの感じだけはおさえることはできぬ。